

## 【第一話 テーマパークの中の人】

連日の猛暑日。

猛暑日の史上最多記録をどうやら塗り替えたらしい今日この頃。

そう、今年の夏は猛烈に暑くて猛烈にしんどい。熱中症患者が過去最高を記録したとの情報も聞く。

そんな今年の夏の日、外に一瞬でも出るだけで汗だくになる。

全く以て野外作業の人たちには頭が上がらない。クーラースーツなるものもあるけども、果たしてこの猛暑の前でどの程度快適になるのかと言われると甚だ疑問としか思えない。

それほどの猛暑。酷暑。災害級の暑さ。

この環境の中で最も過酷な職業とも呼び声高いのが、暑い仕事の代名詞の「着ぐるみ」だ。もちろん、消防士やガラス細工師、炭師なんかも過酷であろうが、着ぐるみは一般の人々に暑くて過酷な仕事として容易に想起される仕事の中では断トツを誇っている。

当たり前だ。暑いに決まっている。暑くないわけがない。

冬でも汗だくになるほどの分厚くてモコモコした生地、足つま先から頭の先端まで、肌の露出は一切許されずに厳重に密閉される環境。そんな着ぐるみを身に着けた上で激しいダンスやファンサービス。可愛い見えた目とは裏腹に、着ぐるみの中は極めて過酷だ。

カワイイキャラクターを見る人たちは、普段中の人のことなんて一切考えない。キャラそのものとして扱い、可愛い世界の中で躍動するファンタジーに心を躍らせる。が、流石にこの夏はそうはいかなかった。超炎天下の今年の夏の前では、着ぐるみたちに同情の意をどうしても持ってしまうのは致し方ないことだろう。

そんな人たちに今日はフォーカスしてみようと思う。そんなごくありふれた日記の様なものが当該読み物になる。そこまで興味深い内容は無いと思うけども、悪しからず。

---

ここは某テーマパーク。1日に10万人が訪れる日本最大級の遊園地だ。ここで登場するキャラクターたちはかなりの数があり、その中でも主要キャラに関してはいずれも世界的に有名。いずれのキャラクターも知らない人は皆無なほど、どのキャラクターも個性が立っていて実に可愛らしい。

その遊園地では非常に多くのキャラクターたちが着ぐるみとして出演する。そこまで数多くの着ぐるみを演じるためには全国から多くの人を採用してシフトを組み立てて、無理なく稼働させる必要がある。

着ぐるみ着用者は全員が必ずダンス経験者であり、かつオーディションを1年に1回必ず受けて合格してきている猛者たちだ。そんな人たちが大勢働くとなれば、さぞ人手不足なのでは？と感じてしまうが、それは杞憂に過ぎない。

毎年毎年、全国からこの遊園地のキャラクターたちになりたいと志願する人々が後を絶たない。素晴らしいダンススキルを持っている人たちが、顔を隠してキャラクターの魂として身をささげる。

それほどまでキャラクターは人々を魅了するものだが、着ぐるみの中の人として活躍するというのはやはり現実が重くのしかかり、そうファンタジーな夢見心地なままではいられない。如何せん、生きていくために必須のお金に関しては、十分とは言い難いのは現実である。

キャラクターの中の人たちが年収300万円前後で、しかも身体的負荷が非常に高くて労災リスクは事務仕事をしている人たち対比で劣悪であることは言うまでもない。働かされていると思うとあまりにも理不尽でさっさとこんな仕事辞めちまえ！なんて思ってしまうかもしれないけども、実際の演者たちは、着ぐるみの中で演じることに、きわめて高い誇りを持ち、キツイ仕事であるけども充実感はあると感じているようだ。

だが...ある一人の人はそういう着ぐるみを演じることの喜びとか人々から黄色い声援をもらうとか充実感とかそういうものをモチベーションとしているわけではなく...着ぐるみの中に入ることそのものが悦びにつながっているとのことらしい。さて一体どういうことなのだろうか。情報収集してきた。

---

私は真壁。男だ。今年でちょうど二十歳の大学生！ごく普通の。  
ただ、他の大学生と少し違っていることをしている。それは・・・某テーマパークでアルバイトをしているということ！！

そうそう、夢の国。幼いころからあこがれていた場所でのアルバイト・・・！本当に働いてきたときは感動して泣いちゃったほどだ(笑)

そんな夢の国のアルバイトで働き始めてから 4 か月ほど。最初はパーク内の列の整理やアトラクションへの誘導、更には売店の応援などに従事していたんだけど、最近は違う部署への異動があるとのことで、今日はその移動の日の 1 日目。

かなり緊張している。緊張しているのも無理は無いというか…最も行きたくて仕方なかった部署への異動だったからだ。

#### キャラクター補助係

この係りの役割は大きく分けて 2 つあって、1 つはパーク内でのキャラクターたちの補助…いわゆるアテンド業務だ。キャラクターもとい着ぐるみは視界がかなり悪くて、まともに音も拾えないことが多い。大きくて重い頭を被って全身モコモコの衣装を身に付ければ自ずと行動が制限されてしまう。

おまけにパーク内にはかなり大勢のお客さん。アテンドなしだとあっという間にお客さんに囲まれてしまって身動きすら取れなくなってしまうほど。。  
お客さんと転ばせてしまったり、攻撃的な客からの暴力やイタズラから守ってあげたりするのも重要な仕事の一つでもある。

そうならないようにするのがキャラクター補助係の役目だ！

そして、この係りのもう一つの役割…。裏方で着ぐるみを演者に着付ける仕事だ。

基本的に、このパーク内にいる着ぐるみたちは自力では脱げないし、身に付けられない。かなり複雑でかつ密閉性が高いので補助が必ず 1 人以上必要になるのだ。

殆どの場合、補助係 1 人に対して複数のキャラにアプローチすることになるのだけど、

今回私は初めての補助係ということと、担当するキャラクターが非常に人気であることから、そのキャラクターの専属補助係となった。

そのキャラクターは・・・カワウソをモチーフにしていて、体はずんぐりとしてモチモチとしたテディベアのような。モフモフ具合が非常に高くおまけに顔も非常に可愛らしく、パーク内で屈指の人気を誇る。グッズも飛ぶように売れていて、パーク内限定の縫いぐるみは転売されてかなり高値で取引されて問題に発展するほどの勢いだ。

そんなカワウソの子、名前をカーフィくんというのだけでも。身長は170cmくらいあるけども、おそらく中の人には140cmくらいしかない。可愛い動き方からしても中の人には明らかに女性だと思っている。中の人の方が女性にもかかわらず男の私が抜擢されていいんだろうか・・・と少し不安になる。着付けの時とか特に・・・

ということで、カーフィの専属アテンドとなった。

そんな1日目、初日、初めてカーフィと一緒に仕事をするようになった。

と、さっそくマネージャーと一緒に案内されたのが、パーク内の華やかさとは程遠いバックヤード。整理整頓はされているものの、人間の活動が垣間見えるような・・・薄汚れた部分が多い。泥やコケ、雑草があるような汚い部分もあり、まさに裏側の世界と呼ぶにふさわしいような空間。。正直ショックというか、やっぱり夢の国は夢のままで終わらせておくべきだったのかなあと思ってしまう。

やっぱりキャラクターの中の人を見てしまったら・・・幻滅してしまうんじゃないだろうかと  
思ってしまう。純粋な気持ちでこれからキャラクターたちを見ることができなくなってしまうんじゃないかと。キャラクターたちの中には当然人がいるんだけど・・・なんだか見ちゃいけないものを見てしまってゲンナリしちゃうのかなって・・・。

そんなことを内心思いながらバックヤードを進み続けて・・・案内されたのが地下の一室。パークのすぐ下にある地下の空間。ここもバックヤードであるけれども、その迷路のような複雑な空間は圧倒されるほどの広さがあり、所見では迷ってしまうんじゃないかと思うほどであった。

少しの不安と緊張の中、どんどんマネージャーに案内されて進んでいく。

目的の場所に着いた。そのバックヤードの一室に私は案内された。ここはキャラクターたちの楽屋のような場所だった。

中に入ると・・・

あ！！！！

なんとなんとカーフィがいるじゃないですか……。心臓が高鳴る。あの超有名で人気のキャラクターが目の前にいる……。！！

カーフィは私に気づいて近寄ってきてくれた。お辞儀をしたり、部屋の中に案内してくれたりした。

……。めちゃくちゃカワイイ。見た目だけじゃなくて動きも物凄くカワイイ。洗練された動きというと夢が無くなってしまいうけど…まさにプロの動きというか……。ちゃんと“生きている”ような動きだった。

本当に可愛いけども、ちょうど楽屋から出る予定なんだろうか…。出番じゃないのに、着ぐるみを身に付けて待機しているなんてことは…あり得ないはずだし…。

楽屋に入ってカーフィと私とマネージャーの三人で簡単に打ち合わせを行った。今日の予定と明日からのスケジュールについて、既に業務内容は伝えてあるの

実はカーフィはグリーティングを終えて楽屋に戻ってきたタイミングだったようで。打ち合わせをしている最中も肩で息をしていたり、何かモジモジとせわしなく動いていたりする様子が見えた。着ぐるみの中がキツイんじゃないかな……。そう私は思いつつも、5分程度の簡単な打ち合わせが終わった。

いったん休憩とのことで、カーフィを解放させてあげてくれということでマネージャーから指示があった。

マネージャーはタイムスケジュールをタブレットに示して、あとはよろしくということで楽屋を出てどこかへ行ってしまった。あとはカーフィが教えてくれるらしい。

楽屋にカーフィと私の二人きりになってしまった。

「あ、改めまして・・・よ、よろしくおねがいます」

緊張しながらカーフィにあいさつした。

・・・すると、カーフィは軽くお辞儀するや否や、私に思い切りハグしてきた・・・！

「わわ・・・！！」

思わず変な声を出してしまった(笑)モフモフとしていて凄く気持ちいいし、少し柔軟剤？のような良い香りが鼻をくすぐった。

そして・・・何よりもかなり温かいことに驚いた…暖かすぎるくらいにかなり熱を帯びているように感じた。おまけに・・・手や腕が物凄く湿っていることも分かった。

かなりモフモフで厚みのある衣装だと思うけども、そんな衣装を通り越して汗で湿っているんじゃないか・・・そう思わざるを得なかった。

「え、えっと次の出番までカーフィくんを脱がせてお休みいただくようになっていますので・・・その、着替えをお手伝いします。」

楽屋はかなり殺風景で、ロッカーとシャワールーム、部屋の真ん中にソファと小さいテーブルが置いてあるだけの部屋。姿鏡が出口にあるくらいのものだ。

着付けのマニュアルがテーブルに置いてあるけども、カーフィは私に色々指示しながら着ぐるみを脱がせていくようにしてほしいと、ボディランゲージで伝えてきた。

緊張してきた私。早速、、脱がせる準備に入った。

まずはカーフィの背中を見た。ファスナーがあるのだが、マジックテープのつけられた外皮でファスナーが隠されている。

まず、背中ファスナーを開けるためにベリベリ・・・とファスナー上のファーを取り払

った。

この時着ぐるみのうなじ付近に触れたのだが・・・先ほどの腕や手なんかよりもかなり激しく湿っていた。それも火照り具合が尋常じゃない状態で、着ぐるみの中の過酷さがよくわかった。

私はドキドキしっぱなしだった。目の前には有名キャラクター。そしてそのキャラクターの着ぐるみを今から脱がせようとしているんだから…。

すると、出てきたのは金属製のファスナー・・・なのけども、このファスナー、鍵でロックできる仕様になっているのだ…。

「え・・・これって・・・鍵で閉まってるの？」

ウンと元気よく頷くカーフィ。

さらにカーフィは机の上に置いてある小さな鍵を指さした。どうやらコレがファスナーを留めている鍵のようだ。

私は・・・なんというか・・・物凄くドキドキした。ドキドキしすぎてしどろもどろになっていたと思う。

ドキドキと緊張しながら鍵を開けて、そして、ファスナーを上から下にジジジとおろしていった。

ムワっとした熱気と汗の匂いが鼻を突く。特に熱気の暑さはとんでもないほどで驚いた。着ぐるみの中は暑いとは聞いていたけども、ここまでの熱気が中に閉じ込められていたとは・・・こんな中で中の方はダンスしたり演技したりしていると思うと・・・なんだがグッと来るものがあった。

次に、カーフィは手を外してほしいとボディランゲージで示してきた。

大きな手はそれぞれ手首の奥の方でファスナーによってボディとつながるようになっている。カーフィの腕の中は・・・ここも凄く湿っていて、そしてかなり火照っている様子だ

った。ファスナーだけジジジジと取り外してあげて、次に首回りのファスナーも開けてあげるようにした。

胴体と頭がファーで繋がっているのはこのファスナーがあるせいなので、胴体の方に隠されているファスナーを開けてあげた。こうして、一通りのファスナーを全て空けてあげた。

全てのファスナーの部分が非常に湿り気を帯びていて、そして火照っていたのは・・・なんとドキドキするようなものだった。

カーフィは大きなおててを、グイッと取りにくそうに外しだした・・・。  
スポンとモフモフとしたカーフィくんの手が取り外された。

「え・・・！？ちょっとまって？え？どういうこと・・・？」

---

## 【第二話 テーマパークの中の人】

モフモフとしたカーフィくんの手が取り外された。  
取り外されて出てきた手は人の手ではなかった。  
いや、正確には人の手なんだろうけども・・・。

淡い黄色のモフモフとした手で、しかも肉球までついている4本指の手だった。

え・・・着ぐるみの中から着ぐるみの手のようなものが出てくるって・・・いったいどういうことなんだろうか・・・。

「え・・・??」

そんな私の驚きを横目にしながら、カーフィは次に割れた背中からまるで蟬が羽化するかのように・・・ヨイショという言葉が発するかのようにしてカーフィを脱いでいった。

そこには・・・全身がピンク色のストレッチファーに覆われた…しかもおっぱいもかなり大きなモフモフした着ぐるみが出てきた。

胸にはブラをしているけども、一体本当にこれはどういうことなんだろうか・・・。

そして、次にカーフィの中の着ぐるみさんは・・・カーフィの頭をグイっと持ち上げた。

「え、えええええ！！？」

そこに現れたのは・・・猫の着ぐるみだった・・・！

目は青色と緑色のオッドアイで耳もピンとあって、鼻もピンク色。おまけに口には牙が 2 本、舌まで備わっていた。全身ストレッチファーと呼ばれるピッチリしたファーに覆われている。

尻尾も長くお尻はボリュームがあってモフモフとしていて可愛らしい。



その猫の着ぐるみはカーフィの抜け殻を腰まで下ろして、足をスポンと抜いた。足もモフモフとしたストレッチファーで覆われている。おまけに足の裏には肉球が備わっているように見える。

ちゃんとパンツまで履いている……。パンツやブラは少し汗で変色しているようにも見える。それもそのはずで、猫の着ぐるみ毛が湿っているように見える。おそらく汗でびっしょりと濡れているんだと思った。

……。え……。？ どういうこと……。？

身長が 140 センチくらいの可愛らしい猫の着ぐるみが、カーフィくんの中に入っていた。

……。衝撃的過ぎて言葉が出てこなかった。

着ぐるみの中に着ぐるみ……。？

中の人を着ぐるみを身に付けてる。。。でも何のため？暑くないのだろうか……。？

メス猫の着ぐるみがブラとパンツを身に付けている……。見ていてかなりセクシーで...変な気分にもなってくる……。

すると、メス猫の着ぐるみはどこからか持ち出したタブレットを操作して。。。自動音声のようなシステムを起動したかと思うと、リノちゃんは可愛らしい声で話し始めた。ボーカロイドのような声だったけども、それとなく会話ができる音声だった。

“驚かせてゴメンナサイ！”

“私の名前はリノ。リノちゃんですっ！”

リノちゃん……。？

「えっと。。。リノちゃん……。でいいのかな？？」

ウンウンと可愛らしく元気に動いた。動いた拍子に水滴のようなものが私にかかってきたけども、おそらくリノちゃんの汗か何かかと思う。

「あ、あの……。さっきまでカーフィ君の中に入っていたのがリノちゃんってことで……。いいのかな」

そう尋ねると、再び元気よくウンウンと頷いた。

「ね、ねえ・・・どうしてこんな格好してるんですか・・・？暑くないんですか・・・？」

私は居ても立っても居られず、ストレートに尋ねてみた。汗で凄く湿ってそうなファーや、やっぱり近くに寄ると結構汗くさい匂いもあった・・・。

すると、リノちゃんは少し考えたかのような動きを見せて、こう話しました。

“私はリノちゃんだから、そういう恰好とかないんですっ！！カーフィ君の中はすごく暑くて死にそうだったのよ～～。”

・・・なんだかはぐらかされてしまった。

結局のところ、中に人はいなくて、入っていたのは人間じゃなくて猫の女の子ということにしたらしい。

私は続けた。

「飲み物は大丈夫なんですか？凄く汗かいているみたいですがでも・・・」

そういって、リノちゃんは冷蔵庫から2Lのスポーツドリンクを取り出し、ペットボトルの入り口に長いストローを挿し入れた。

口にストローを挿入すると・・・すごい勢いでスポドリがどんどん無くなっていった。1Lくらい飲んでなくなったんじゃないだろうか。

“んんう～！回復した～！”

飲み干したスポドリを冷蔵庫に再びしまいにいくリノちゃん。

と、この時、リノちゃんの首付近に・・・南京錠のようなものがちらりと映ったのを私は見逃さなかった。

すかさず私は聞いてみた・・・。

「あ、あの・・・リノちゃん・・・？えっと、その猫の着ぐるみって脱がないんですか？相当暑そうなんですけども」

そう尋ねてみた。はぐらかされるのがオチかなと予測していたけども、かなり予想外の回

答が返ってきた。

“私もすっごく脱ぎたいの・・・本当に暑くて暑くて・・・このリノちゃんすごく苦しくて今すぐ引きはがしたいくらいなの・・・でも、こんな風に入り口が完全にロックされてて・・・見てみて、こんなご立派な南京錠が付いてて、絶対に脱げないようになっているの。。”

・・・衝撃だった。まさか・・・こんな状況を説明してくるなんて・・・きっとリノちゃんの中の人が本当に感じて思っていることなんだと思った。

着ぐるみの中に着ぐるみ。暑くないはずが無いし、きっと酸素だって薄くて苦しいはず。そんな想いをきっと抱いているんだ。。私は何かこみあげてくるものがあつた。

リノちゃんはさらに続けた。

“暑くて暑くて・・・でも熱中症にはならないような仕組みがちゃんとあるから問題は無いんだけどね・・・。でも息は凄く苦しいし、動きにくいし・・・なにより。。。。。。”

と言いかけたところで左右にプルプルと顔を振って、何やらごまかした素振りをしてきた。

おもむろに私の手を握ってきたリノちゃん。いきなりの行動よりも、その手の感触の方に驚いてしまった。

「わっ！って・・・え・・・凄く濡れてるけど・・・」

“そうなの・・・これが現実なの”

“この格好でも・・・信じられないくらい暑くて苦しい・・・。それなのに、その上からカーフィ君になるの・・・。”

そういいながら、私の手を首スジやお腹、脇に誘導して触ってほしいと言ってきた。

・・・信じられないくらいに湿っていた。ギュッと押すだけでもジワッと汗が染み出てくるんじゃないかってほど濡れていることがわかった。

ふつうなら人の汗なんて触りたくもないし感じたくもない。気持ち悪いと思ってしまう。けども、、、なぜカリノちゃんの汗は、、、物凄くグッと来るものがあつた。正直ちょっと興

奮ってしまった。

“これだけ汗をかいても・・・許してもらえないの・・・。本当に暑くて苦しくて気がおかしくなりそうになっても、この格好からは解放されない・・・そういう仕組みになっているの・・・。”

一体どういう意図でこんなことになっているんだろう・・・。それにしてもリノちゃんはかなりセクシーな着ぐるみのせいでまともに直視できない・・・特にパンツは…女性特有の割れた部分もしっかりと再現されているかのようにシルエットが浮き彫りになっているように見えて、、その、、エッチだった。

・・・ん？

そういえばさっきお腹を触ったときに感じた違和感は何だったんだろうか・・・

いや、さっきは触れたときの湿り気に気を取られていたんだけど・・・よくよく耳を澄ませてみても・・・あ、やっぱり聞こえる。

私はリノちゃんに尋ねてみた。

「あの・・・さっきからブーンって微かに電子音が聞こえるんですけども・・・。お腹を触ったときも少し振動しているようにも感じましたし・・・これって何ですか？中に扇風機があったりしているんです・・・？」

リノちゃんは少し考えるそぶりをして・・・再び私の腕をつかんで、そしてちょうどおへその下あたり、下腹部のところに手を誘導した。

一体ここに何があるというのだろうか。。

って・・・え！！??

そこでは・・・何やら振動していることが分かった。

手で触らないと決して分からない振動。音もかなり小さくて、ここまで接近しないと分か

らない・・・。

でも確かに下腹部で謎に振動している何かがあった。

下腹部を撫でたりグイと指で押したりしていると…リノちゃんは何かに耐えるように、太ももをすり合わせたり、腰がヒクッと動いたり苦しそうな動きを見せている。

何があるのかと暫く触っていると…振動とは別に、ピク・・・ピクッと周期的ではない感じで、何かがうねる様な動きを感じた。

指で押してみるとコリコリしていてそここの硬さがあって・・・あ、またピクピクって動いた・・・。指で押すと振動がはっきりと感じ取れるようになる。

・・・ん・・・？おまけに少し精子っぽい男のニオイがする・・・。汗の匂いと混ざって精子のニオイ・・・え・・・ということは・・・うそでしょ・・・え。。

・・・というところまで知ってしまったところで、私はハッとになって下腹部から手を離れた。

「え・・・え・・・え！？嘘でしょ・・・リノちゃん・・・もしかして男の人・・・？」

リノちゃんは頭をポリポリとかいてこう答えた。

“私はおっぱいも大きいしこんな格好してるからメスねこだよっ！でも、私を演じてくれている誰かがいたとしたら・・・男性かも・・・(笑)”

再び衝撃だった。。。いや、衝撃というよりなんだか悔しかった。同性が・・・こんなに可愛らしい恰好をしながら・・・中で振動を受けて感じている・・・ってことなの・・・？  
どういことなんだろう・・・え？・・・なんのために・・・？

私はかなり混乱しては今の状況を整理できずにいた。

質問しようにも、軽くパニックみたいな状態になっていておろおろしてしまっている私。  
そんな状態を見て・・・リノちゃんは再び話し始めた。

“秘密保持の契約を結んでいるから・・・話しちゃうね”

第三話に続く

---